

## 論文内容要旨

Exploring a method for evaluation of preschool and school children with autism spectrum disorder through checking their understanding of the speaker's emotions with the help of prosody of the voice

(音声のプロソディを手がかりにした他者の感情理解による自閉症スペクトラム幼児・児童の評価方法の検討)

Brain and Development, 39: 836-845, 2017.

主指導教員：岡村 仁教授

(医歯薬保健学研究科 精神機能制御科学)

副指導教員：花岡 秀明教授

(医歯薬保健学研究科 老年・地域作業機能制御科学)

副指導教員：祖父江 育子教授

(医歯薬保健学研究科 小児看護開発学)

堀江 真由美

(医歯薬保健学研究科 保健学専攻)

## 【論文内容要旨】

話しことばにおいて、辞書的なことばの意味で意図が伝わる場合と、音声によって伝わる意図が異なる場合がある。例えば、「すごいね」という言葉も音声のプロソディを変化させることによって、言語的意味そのままの褒め言葉として伝わる場合と、失敗した人に皮肉として伝わる場合がある。

先行研究において、言語的意味に左右されずに音声のプロソディを手掛かりに話者の感情を理解する能力を調べるため、定型発達の子供と小学校低学年の児童を対象に、高い言語能力を必要としない子ども同士の日常会話で使用される語句を用い、その語句の音声のプロソディを変化させることにより、話者が否定的な感情か肯定的な感情かを判断させた。実施には【受容】【拒否】【強がり】【ふざけ】の感情を表す4つの音声を用いた。その結果、定型発達児では辞書的なことばの意味と、音声によって伝達される感情が一致し、ともに肯定的な場合の【受容】は年中児以降でほぼ100%の理解となり成人と同じ理解レベルに達し、ともに否定的な場合の【拒否】では年長児以降で90%前後の理解となった。一方、辞書的なことばの意味と、音声によって伝達される感情が異なる場合、特に辞書的なことばの意味が否定的で、音声によって伝達される感情が肯定的な【ふざけ】を表す場合は就学前の幼児では年少では約8%、年中で40%台、年長で60%台、小学生になると90%以上の理解となり、実施した音声の中で最も遅く発達することが明らかとなった。

そこで本研究は、コミュニケーションをとるために必要となる他者の信念理解が遅れるとされる自閉スペクトラム症125名の幼児・児童を対象に、音声のプロソディを手がかりとした話者の意図を理解する能力を調べるために、発達年齢で対応させた定型発達児119名と注意欠陥・多動性障害児51名と比較し、幼児期から自閉スペクトラム症児を客観的に評価する方法を検討することを目的とした。実施には先行研究と同様の課題を用いた。

その結果、自閉スペクトラム症児の【ふざけ】の感情理解の正答率は、年中児～小学6年相当のすべての発達年齢において定型発達児よりも有意に低かった。すなわち、【ふざけ】の正答率は、定型発達児は小1から90%以上の正答率に達したが、自閉スペクトラム症児では発達年齢が年中相当では約6%、年長相当では約18%、小1相当では約33%、小3相当以降でも成人レベルに達せず50%台であった。【受容】【拒否】【強がり】の正答率については、発達年齢年中相当の【受容】【強がり】と小1相当の【強がり】を除いては、年少～小6の間で、自閉スペクトラム症児と定型発達児の正答率に有意な差はみられなかった。自閉スペクトラム症児の【受容】【拒否】の正答率は、発達年齢年少相当の発達年齢の時期から、【強がり】の正答率は小1相当から80%以上を示した。

これに対して、注意欠陥・多動性障害児の【ふざけ】の感情理解の正答率は、発達年齢就学前相当では自閉スペクトラム症児、定型発達児とも有意差がなかったが、低学年相当では定型発達児より低く自閉スペクトラム症児よりも高く、高学年相当では定型発達児と有意差がなく自閉スペクトラム症児より高かった。【受容】【拒否】【強がり】の正答率については、全ての発達年齢で注意欠陥・多動性障害児と定型発達児、自閉スペクトラム症児との間に有意な差は認められなかった。

本結果より、話者の感情を理解するための手がかりとなる音声の中で、特にことばの意味と音声により伝達される意図が異なる【ふざけ】の感情を理解することが、自閉スペクトラム症児では難しいことが示され、自閉スペクトラム症児の客観的な評価方法に利用できることが示唆された。